

# 被災地派遣レポート〈第17回〉

主税局徴収部個人都民税対策課 羽生 真一郎 さん

## ■福島県災害対策本部へ

3月の大震災の日、都庁舎から見た京王プラザホテルのぐにゃぐにゃと揺れる姿や、テレビに映し出された津波に襲われる大地、花火大会のように混雑した夜の甲州街道の家路など、これは大変なことになったという思いが日々強くなっていました。阪神大震災が起こったとき、神戸に行こうという友人の誘いに何となく尻込みし、そのことがずっと心残りとなっていたこともあり、今回はやれることはやろうと考えていました。

今回の災害対策本部への派遣第一陣5名のうち、物資班は自分一人のため、最初は少し心細いかな、とも考えたのですが、実際に現地に着くと現場の物々しい雰囲気にもまれて、慌しく過ごすこととなりました。原発問題の見通しがはっきりしない中、いつ落ち着くとも分からない本部での業務をこなす県職員の粘り強さは本当にすごいと思いました。

## ■物資班での業務について

福島県は北海道、岩手県に次いで3番目に大きいそうです。そのため、天気予報なども太平洋側から「浜通り」、「中通り」、「会津」と地理的・気候的に区分されています。県の組織としては、都での支庁のような地方組織が7つあり、県北（けんぼく）、県中（けんちゅう）、県南（けんなん）、会津、南会津、相双（そうそう）、いわき、と各地方組織にもそれぞれ災害対策本部が設けられており、市町村のとりまとめを行っています。物資班では、避難所への日用品や食料品の物資の供給を行っており、毎朝10時までに各地方災対から翌日の食料品等の物資の要望がメールやファックスで送られてきます。おにぎりやパンなどの主食は、県で発注し、その他の食料品は義援物資の在庫リストから類似品等を探して配送の手配をするというのが主な業務でした。避難所では個別に市町村が調達する場合もあり、県のとりまとめは全体の一部ですが、間違いがあると被災者に食料が届かなくなってしまうため、大切な業務です。日中は問合せや苦情の電話も多く、聞き慣れない地名やアクセントに戸惑いながら、一週間という短い期間のため、聞いたことは必ずメモを心がけ、第二陣への引継書をつくりながら作業を行いました。避難所への物資供与調整も、震災当初に比べるとだいぶ落ち着いてきたとのことでしたが、着任中も倉庫の統廃合や在庫管理、発注方法の見直し、災害救助法の解釈の検討など、県職員は対応に追われていました。警戒区域の自治体が域外の他の自治体に避難するため、行政区域を越えた避難所の扱いや、原発事故の見通しがたたないため中長期的に物資供与をどう考えるか、そもそもの義援物資の需給マッチングなど、問題を抱えつつも仕事に取り組んでいる県職員の姿に感銘を受けました。

## ■おわりに

一週間という非常に短い期間でしたが、半分を過ぎた土曜日、日曜日には問合せ等の電話も少なく、一通りの業務を自ら行うことができ、県職員の方から「今日は全部やってもらって助かりました、ありがとうございます」と言われた時は、ほっとして、何とか第一陣としての役割は果たせたかなと思います。県職員の増川さん、松本さん、ありがとうございました。

偶然ですが、夕食を食べたお店の店長さんと話をしていたら、都内から福島に転居して十数年とのことでした。福島は、山も海も温泉もスキーもゴルフも田舎も都会も全部車で一時間で行けるすばらしいところだと熱く語ってくれました。だからなおさら、今の状況が悔しいとのことでした。返す言葉は見つかりませんでした。6月14日の着任時に現地の都事務所の早川部長から言われた、感謝の気持ち、恩返しで業務に当たってほしいとの言葉を思い出しました。

福島県への支援は、これからも長期に渡って行われることと思います。自分は今回の派遣では多くのことを学ぶ貴重な経験を得ました。今後多くの職員がこの支援活動に関わり、東京に電力を供給してきた福島県でどういうことが起こっているのか知ってもらえたらと思います。